



Qlik Cloud Analyticsの キャパシティ容量の仕様に関する解説

クリックテックジャパン株式会社

Oct 2025

分析データ概要

分析用データ

- Qlik Cloud Analyticsは分析用データ量で測定されます。毎月のピーク使用量は、購入した容量に基づいて測定されます。分析用データ メトリクスは、Qlik Cloud にロードされ、存在するすべてのデータの合計です
- メトリクスに含まれるデータ
 - 外部ソースから Qlik Cloud にロードされたデータ
 - リロードの場合、新しい増分データによってデータ数が増加します
 - リロードのデータが少ない場合、データ数は減少します
 - Qlik Cloud にアップロードまたは Qlik Cloud で作成されたデータ ファイル
 - ファイル サイズがカウントされます
 - Qlik Cloud 内でデータ ファイルをコピーすると、新しいデータ ファイルもカウントに含まれます
- 計算方法
 - Qlik Sense アプリ経由で Qlik Cloud に取り込まれる外部データの量。
 - Qlik Data Gateway - Data Movement 経由で Qlik Cloud にロードされる外部データの結果の QVD ファイル サイズ
 - Qlik Cloud にアップロードされるデータ ファイルのファイル サイズ。
 - アプリの静的バイト サイズ

分析キャパシティのカウント方法

月間のピークが、購入容量に対して測定されます

<ul style="list-style-type: none"> エンドユーザーの活動は月間ピークに影響しません 				
<ul style="list-style-type: none"> # エンドユーザーのアプリの数と規模は月間ピークに影響しません 				
<ul style="list-style-type: none"> ファイルはファイルサイズの合計でカウントされます 				
<ul style="list-style-type: none"> 各アプリケーションは、その日の外部ソースから取り込まれた最大バイト数でカウントされます。 リロードがない場合、前回の最後のリロードが繰り越されます 				
<ul style="list-style-type: none"> ロードされたデータと生成されたデータの合計が日次ピークとなります 日次ピークの最大値が月次ピークとなります 	3GB	6GB	5GB	3GB

Monthly Peak
6GB

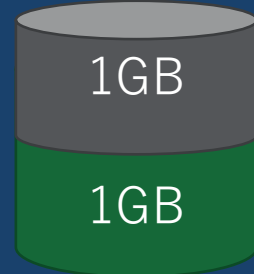
Loaded Data キャパシティの例

Data Set

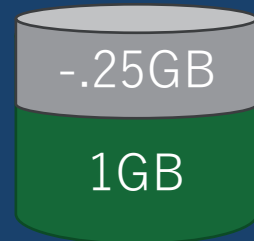
- 変更されていないソースデータセットは、日次ピークに変化を与えることなく、複数回リロードすることができます
- データセットの増加は日次ピークに反映されます
- データセットの減少は日次ピークに反映されます
- サイズが変化しないデータセット(X日後にデータがロールオフするなど)を変更しても、日次ピークは変化しません



= 1GB



= 2 GB



= .75 GB



= 1GB

Loaded Data キャパシティの例

Application

- 同じデータセットに対する複数のクエリ(スクリプト内に複数のクエリ)は、1日のピークに複数回カウントされます



Multiple Queries (x3)



= 3GB

次のデータロードが実行されない場合、分析データ量はそのままになり、月が替わっても変化しない

- アプリをロードした後に、テーブルを削除してもデイリーピークは減少しません(デイリーピークはアプリケーションの最大リロードサイズに基づいているため)



Drop Table



1GB

- アプリを削除すると、翌日(つまりアプリが存在しない最初の日)のデイリーピークが減少します



1GB
For the Day

- SQLプッシュダウンは日次ピークには影響しませんが、インメモリ・コンポーネントは適用されます(ダイレクト・クエリ/ダイナミック・ビューなど)



Dynamic Views
Direct Query



Partial GB

Consumption Report

Data for Analysis

Consumption Report概要

- データ容量レポートアプリ(Consumption Report)を使用すると、ライセンス容量をどのように使用しているかを概要レベルと詳細レベルの両方で監視できます
- 詳細なレポートにより、使用状況とサブスクリプション資格との整合性を把握できます
- 例えば、消費に貢献したりロード、自動化、レポートがどれであることを正確に確認できます
 - [ヘルプ](#)
 - [スライド](#)
 - [動画](#)

Consumption Report内ステータス

- Consumption Report内で分析データ計測に使用されるステータスは以下の通りです
- 項目名: DATA_ANALYZED_DETAILS.DATA_VOLUME_SOURCE_QDA
 - App Import Qlik Cloud にアプリをインポートした際に計測されるデータ量
 - App Reload Qlik Cloud でアプリをリロードした際に計測されるデータ量
 - Datafile Qlik Cloud にアップロード、アプリで生成されたデータファイルのサイズ
- 項目名: DATA_ANALYZED_DETAILS.DATA_VOLUME_SOURCE_DETAIL_QDA
 - Max daily App Import 同じ日にインポートされた場合の、アプリの1日の最大インポートサイズ。
 - Previous App Import 前日までに記録された最後のアプリインポートサイズ
(当日にリロードされていない場合に使用)
 - Max daily App Reload 同じ日にリロードされた場合の、アプリの1日の最大リロードサイズ。
 - Previous App Reload 前日までに記録された最後のアプリリロードサイズ
(当日にリロードされていない場合に使用)

注意点

- QVD生成用アプリにて、データロード後にテーブルをドロップしても7ページに記述されているように分析データ量はリロードに使用したメモリ使用量となります
- 日次でタスクを組んでいる場合、分析データ量は日次で計測されるので特に注意は必要ありません
- QVD生成を週次、もしくは月次などで実施している場合、テーブルをドロップしてアプリのサイズが0バイトだとしても、翌日以降も分析データ量は変化しません
- この状態は月が替わってもリセットされずに同じ分析データ量となります
- 外部ソースにQVDをStoreして、再度アプリにロードする場合はデータ量は倍になる
- [Qlik Community記事](#)

対応策

- 週次、月次のQVD生成アプリのデータロード後に、同一アプリにて0データロードをする
- データロードエディタ上で条件分岐のスクリプト処理が必要
- 0件データロードの対応は手動、スケジュールタスク、自動化のどれでも実行可能
- データロードの検証については、「分析データ量検証」ページ参照

- データ更新の方法は以下の2通り
 - スケジュールでタスク実行時間を指定して1日に2回データロードする
 - Qlik AutomateでTask Chainの自動化を作成する

スクリプト例

0件データロード

```
LET vToday = chr(39) & Date(Today()) & chr(39); //当日の日付を取得
LET vLastReload = chr(39) & date(ReloadTime()) & chr(39); //前回データロード日付を取得

if $(vLastReload) = $(vToday) then
Else

Table:
LOAD
    伝票番号,
    伝票日付,
    製品コード,
    顧客コード,
    販売価格,
    販売数量
FROM [lib://Office_365_Sharepoint - HKA@qlik.com/Documents/QData/販売伝票.csv]
(txt, utf8, embedded labels, delimiter is ',', msq);

store Table into 'lib://共有:DataFiles/TableNoExitDaily.qvd'(qvd);

Drop Table Table;

End If;
```

- vTodayで当日の日付を取得
- vLastReloadで前回データロード日付を取得
- if \$(vLastReload) = \$(vToday) then
 - 前回と当日の日付を比較し、同じ場合何もしない
 - 前回と当日の日付を比較し、違う場合データロード

スクリプト例

Exit Scriptを使用した0件データロード

```
LET vToday = chr(39) & Date(Today()) & chr(39); //当日の日付を取得
LET vLastReload = chr(39) & date(ReloadTime()) & chr(39); //前回データロード日付を取得

if $(vLastReload) = $(vToday) then
    Exit Script;
End If;

for i = 0 to 9

Table:
LOAD
    伝票番号,
    伝票日付,
    製品コード,
    顧客コード,
    販売価格,
    販売数量
FROM [lib://Office_365_Sharepoint - HKA@qlik.com/Documents/QData/販売伝票.csv]
(txt, utf8, embedded labels, delimiter is ',', msq);

next i;

store Table into 'lib://共有:DataFiles/Table.qvd'(qvd);

Drop Table Table;
```

- vTodayで当日の日付を取得
- vLastReloadで前回データロード日付を取得
- if \$(vLastReload) = \$(vToday) then
 - 前回と当日の日付を比較し、同じ場合0件のデータロードをし、Exit Scriptでスクリプト中止
 - 前回と当日の日付を比較し、違う場合そのままデータロード

スケジュール例

1スケジュールで1日2回更新

タスク名
Load Exit Script Daily 2回ロード

説明
説明を追加

アクション
完全なりロード

基準
間隔 - 毎日

1日あたりの回数
2時間毎

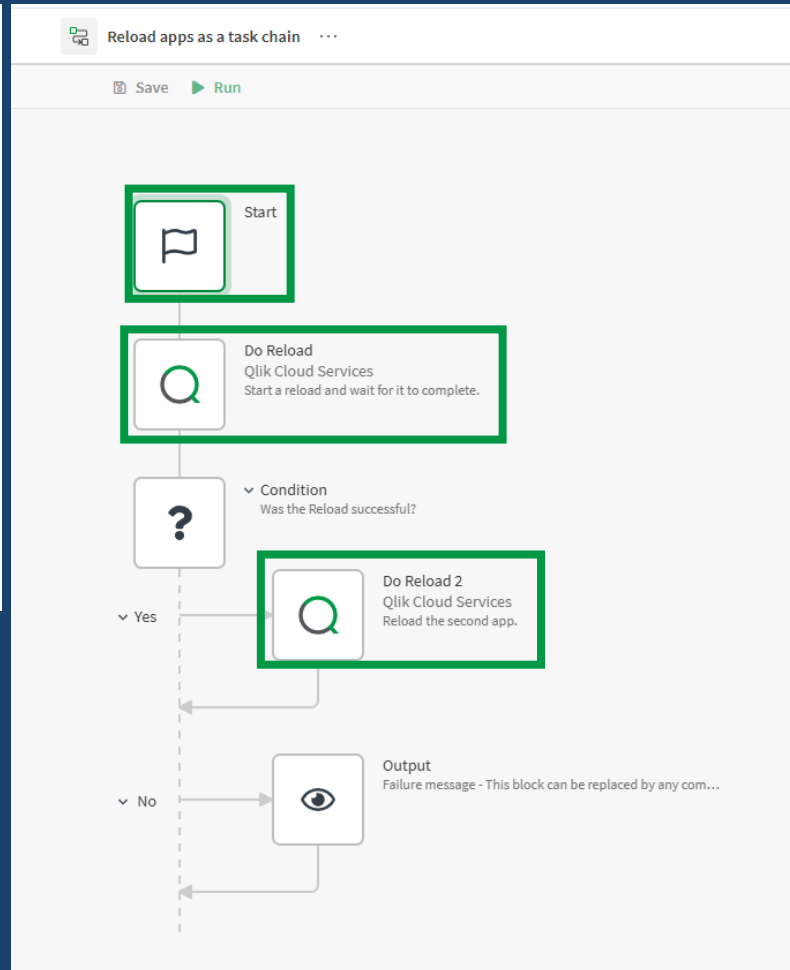
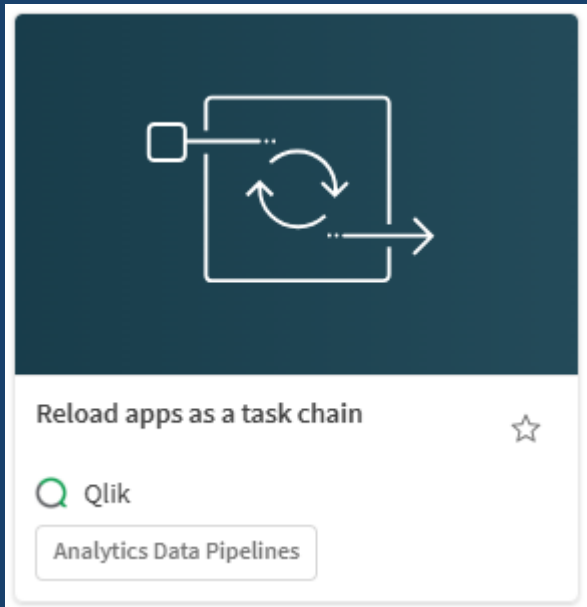
タイムゾーン
(GMT +09:00) アジア/東京

その日の最初の時間
05:00

これらの時間の間に実行
0:00 5:00 9:00 23:59

- 週次や月次などの更新の場合、1スケジュールで2回のデータロード設定
- 基準を毎日に設定
- 1日あたりの回数をn時間毎に設定
- スタート時間の設定
- これらの時間の間に実行を1回目と2回目の実行時間を含み、3回目以降を実施しない時間に設定

自動化例(Qlik Automate)



- テンプレートの「Reload apps as a task chain」を使用
- Startの「Run Mode」を「Scheduled」に設定し自動化のスケジュールを設定
- 「Do Reload」、「Do Reload2」に同じアプリを設定
- 「Save」して完了

Consumption Report注意事項

- データ更新はヨーロッパ中央時間:午前7時(日本時間:午後4時)
- Consumption Reportの日付、時刻の初期設定はヨーロッパ中央時間です
- 個人のプロファイルのタイムゾーン、地域設定をすることで変更可能
- 合わせて内容を確認する可能性のあるReload Analyzerはスクリプトのvu_GMT_offsetで設定可能



タイムゾーン

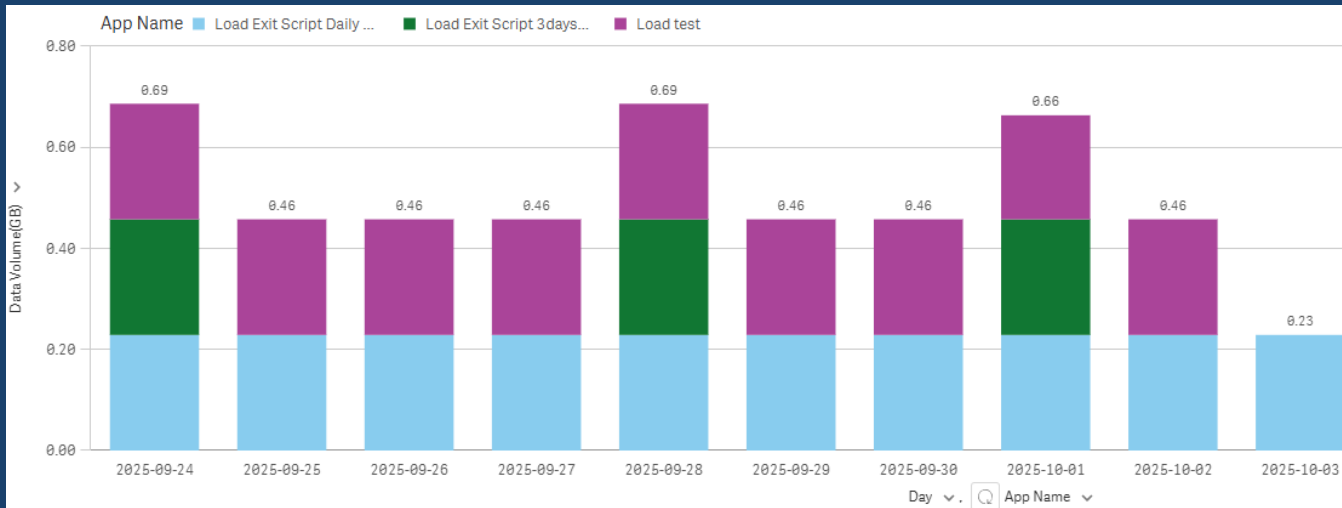
(GMT +09:00) アジア/東京 ▼

アプリと他のデータ準備を作成するための地域設定

Japanese (Japan) ▼

```
/*  
1. The timezone difference from GMT. Modifies the reload times to desired GMT offset  
   Example 1: -5  
   Example 2: 5  
*/  
SET vu_GMT_offset = 9;
```

分析データ量検証



検証結果

- Load Testのように1度データロードしてDrop Tableしても分析データ量は保持される
- Load Exist Script 3Days No Dataのように2回目に0件データロードを実施すると分析データ量は翌日に計測されない

- 検証方法:3つのアプリにて分析データ量の検証を実施

● Load Test

- 手動で通常データロード後8日放置
- 9日目に手動で0件データロード実施

● Load Exist Script Daily no Data

- 1回目は通常データロード、2回目は0件データロード
- スケジュールで毎日、2回データロード実施

● Load Exist Script 3Days No Data

- 1回目は通常データロード、2回目は0件データロード
- スケジュールで週2日、2回データロード

※全アプリ通常データロードにてDrop Tableを実行

Qlik™